

日本海磯根対策試験（藻場造成）

（要約）

山内 弘子

深浦町北金ヶ沢地先には、離岸堤が設置され、その陸側が静穏域として活用されている。静穏域内には、アワビ放流用の投石漁場が造成されたが、浮泥が観察され、餌料となる大型海藻の生育が認められない。このため、そこで餌料藻場を造成することを目的に、幼胚供給によるホンダワラ類藻場の造成を試みた。

調査方法

試験場所は、深浦町北金ヶ沢地先の離岸堤の陸側にある、水深7 m前後の投石漁場とした。

平成12年5月10日、投石漁場西角に、幼胚採苗用基質として大きさ60cm×30cmのコンクリートブロックを計8枚設置した後、幼胚供給のためフシスジモク、アカモク、ヤツマタモク、マメタワラ、ヨレモクの5種の成熟した主枝各々約500 gを、大きさ50cm×80cm、目合い5.5mmの網袋に入れ、各基質の高さ30cmの海中に浮くように結着した。平成13年12月5日、平成15年1月7日にコンクリートブロックに生育するホンダワラ類を計数した。また、平成14年6月14日、9月11日、平成15年1月7日、2月17日には、その周辺で藻場の形成状況を観察し、2月にはその面積を測定した。

平成13年5月28日には、深浦町田野沢地先でモヅク漁に伴って漁獲された生殖器床を形成するヤツマタモクの主枝100kgを入手し、同じ目合いの網袋8枚に等量に分けたものを5組用意し、1組ずつ土俵1俵に結着した後、投石漁場中央に約5 m間隔で投入した。平成14年1月19日、平成15年1月7日に、50 cm四方の枠を用いて土俵周辺5か所に生育するヤツマタモクを計数した。

平成14年5月24日、前述のとおり入手したヤツマタモクの主枝300kgを、同じ目合いの網袋8枚に等量に分けたものを15組用意し、1組ずつ土俵1俵に結着した後、投石漁場の西角、南角、東角に5組ずつ投入した。

結果および考察

平成13年12月、平成15年1月に、コンクリートブロックに生育する藻体を観察した結果、体上には浮泥が沈着せず、ブロック1枚当りに生育する藻体の平均値は、平成13年12月に18個体、平成15年1月に7個体と、約1年後には4割に減少した。一方、その周辺で藻場の形成状況を観察した結果、幼胚供給から2年4か月後の平成14年9月には、その周辺の投石漁場でホンダワラ類の小群落が確認され、メバル等が観察された。平成15年2月に、形成された藻場の面積を測定した結果、それは約1,400㎡と投石漁場の6.5%に当たり、生育するホンダワラ類の一部にはエゴノリが観察された。

投石漁場中央の土俵周辺に生育するヤツマタモクは、平成14年1月には28個体/㎡、平成15年1月には17個体/㎡で、1年後には6割に減少した。

今後、西角に形成されたホンダワラ類小群落の面積を継続して測定するとともに、平成13年5月と平成14年5月に、ヤツマタモクの幼胚を供給した周辺で、藻体の発生および藻場の形成状況を観察する予定である。

平成14年度日本海磯根対策試験報告書.青森県水産増殖センター,平成15年3月.